

中国中世の喪葬と仏教についての一考察

— 隋張盛墓の儀礼と信仰空間 —

向井 佑介

1. はじめに

6世紀に朝鮮半島から日本列島へと伝来した仏教は、当時すでに故人の冥福を祈願する役割が期待されていた。百濟後期の都、泗泚（忠清南道扶余）で発掘された陵山里寺（陵寺）は、昌王（威徳王）13年（567）銘の舍利龕をともない、隣接する古墳群に埋葬された王の追福のための寺院であったと考えられるし（李 2015）、王興寺塔址から発掘された青銅製の舍利外容器には丁酉年（577）に昌王が亡き王子のため舍利を納入した旨の銘文が刻まれていた（国立扶余文化財研究所編 2017）。

南北朝時代の中国でも、故人の追福のために造寺・造塔・造仏がなされた例は少なくない。北魏洛陽城東の秦太上君寺は靈太后胡氏が母の追福のために建てたもの、城南の報徳寺は高祖孝文帝が文明太后馮氏の追福のために造営したものとされ、また清河王元懌の捨宅寺院であった城西の沖覺寺には元懌の死後に追福のため五層浮図が建立されたという（楊街之『洛陽伽藍記』巻2・巻3・巻4）。石窟などの造像にも同様の例をみることができ、例えば龍門石窟古陽洞の北魏太和19年（495）長樂王丘穆陵亮夫人尉遲造像記、同20年（496）一弗造像記、同22年（498）比丘慧成造像記などは、いずれも亡き家族のために造像したことを記している（水野・長廣 1941）。

一方で注意すべきは、上の例はあくまで死者の葬儀とは別に、追善供養のため寺塔を建立したにすぎず、葬儀に仏教ないし僧侶が関与したことを意味するわけではない、ということである。後漢以降の墓室内装飾や副葬品には仏教的要素を含んだものがあり、その点において仏教と喪葬が無関係だったわけではない。しかし、仏教が貴族層にひろく浸透していた当時であっても、死から殯をへて遺体を墓に埋葬し、靈魂を廟にまつるまでの過程は原則として儒教的儀礼にもとづいておこなわれており、在俗の貴族たちが仏式の葬儀を採用した形跡はみとめられない（向井 2014）。

それでは、在俗信者たちの葬儀に仏教の教団や僧侶が関与することはなかったのだろうか。本稿はその問題を考える初歩的な試みとして、墓室内から発見された僧侶の造形と図像をとりあげて検討する。具体的には、隋張盛墓の比丘俑など仏教的要素をもつ副葬品を再検討し、近年発見の新たな資料と比較しながら、それがいかなる儀礼や信仰にもとづいていたのかを考察することにした。

2. 隋張盛墓の構造と副葬品

1959年5月、河南省安陽市北郊の豫北紗廠（現在の豫北棉紡織有限責任公司）付近、すなわち殷墟宮殿宗廟区の東方において、隋代の墳墓1基が発掘された（考古研究所安陽発掘隊 1959）。傾斜墓道をともなう塋室墓の内部からは、白磁の容器類や俑・明器など192点の副葬品が発見された。

棺床の東南から発見された墓誌は、一辺 48cm の正方形で、蓋石頂部に「張君之銘」の篆刻があり、誌石には「隋故征虜將軍中散大夫張君之銘」に始まる 20 字×20 行の銘文が刻まれていた。それにより、これが隋の開皇 15 年（595）に埋葬された張盛夫妻の墓であることが判明した。

張盛の名は正史にみえない。墓誌によれば、字は永興、南陽白水（河南省南陽）の人である。出仕して郡功曹を務めたのち、左衛殿中將軍に転じ、加封されて龍驤將軍となった。墓誌の文章にはやや不可解な点があるものの、積射將軍・秦州五零県令をへて、征虜將軍中散大夫に昇進したとされる。そして、隋の開皇 14 年（594）正月に相州安陽県修仁郷の邸宅において 93 歳で亡くなった。

夫人の王氏は南徐州の人で、右將軍・散騎常侍澄城公の王凝の娘である。隋の開皇 6 年（586）に靈泉県（河南省安陽市西南）の邸宅において 67 歳で亡くなり、同 15 年（595）に相州安陽城の北五里の白素郷に合葬された。

（1）張盛墓の構造と副葬品

張盛墓は、南側に傾斜墓道をともなう塼築の単室墓である。墓道の奥に長さ 1.4 m×幅 0.9 m の甬道があり、墓室へと通じている。甬道の両側には小耳室が付属し、甬道南端は塼を積んで閉塞していた。墓室は胴張りをもつ方形平面を呈し、長さ 2.8 m×幅 2.9 m をはかる。墓室床面は塼敷で、その北壁に接して、東西 1.98 m×南北 1.1～1.3 m×高さ 0.34 m の棺床が築かれていた。棺床上からは頭を東に向けた 2 体の人骨が発見され、また十数点の鉄釘が検出されたことから、遺体はもともと釘付式木棺に納入されていたことが知られる。棺床の四隅からは複弁蓮華紋をあらわした白陶質の台座 4 点が発見されており、蓮華座中央の小孔に支柱を立てて帷帳を形成したと考えられる（図 1 左）。

墓室内から出土した副葬品 192 点は、地下水の影響を受けて原位置をとどめるものは少なかった。約 4 割を人物俑が占め、甬道両側龕に刀剣をもつ大型侍吏俑、甬道両側に甲冑の鎮墓武人俑、墓室口の両側には人面と獣面の鎮墓獣が各一对で置かれ、この 6 体はすべて白磁に加彩したものであった。墓室内からは男女の儀仗俑 35 体、伎楽俑 8 体、舞人俑 5 体、家事労働の姿をあらわした侍従俑 27 体、胡人俑 2 体、比丘俑 2 体が発見され、それらは白陶に彩色を加えたものであった。

模型明器の類では、白陶の鶴・鴨・鷺鳥・鳩・羊・犬・豚などの家畜が 9 匹、牛車を構成したと考えられる牛 1 匹と車輪 2 点、井戸・竈・碓・磨臼・碾・建物などのミニチュアがあり、これらは墓主の財産を象徴している。これに対し、白磁の案・凭几・燭台・碁盤・枕・鉢などは、基本的に室内で用いる器物であり、墓の主人が身のまわりで親しく用いるものであることから、材質の上でも区別された可能性があるだろう。あるいは、墓主を象徴する器物といってもよい。そのほか、壺・瓶・罐・環足盤・三足炉（鼎）・博山炉・灯具・碗・盒などの白磁類が 52 点、銅鏡 1 面が出土した。

なお、当初の報告（考古研究所安陽発掘隊 1959）が張盛墓の白磁を「青瓷」と称するのに対し、馬世長（1983a・b）はそれを北齊范粹墓出土例とあわせて初期の「白瓷」とした。小林仁も、隋初に本格的な「白瓷」が出現していたことを明示する代表的作例としてこの資料を重視する。張盛墓の「白瓷俑は、陶磁史上の意義のみならず、その彫塑作品としての造形水準の高さにおいても、隋俑を代表するに相応しい風格を備えたモニュメンタルな作品」であり、俑の組成には「鎮墓俑としての侍吏俑

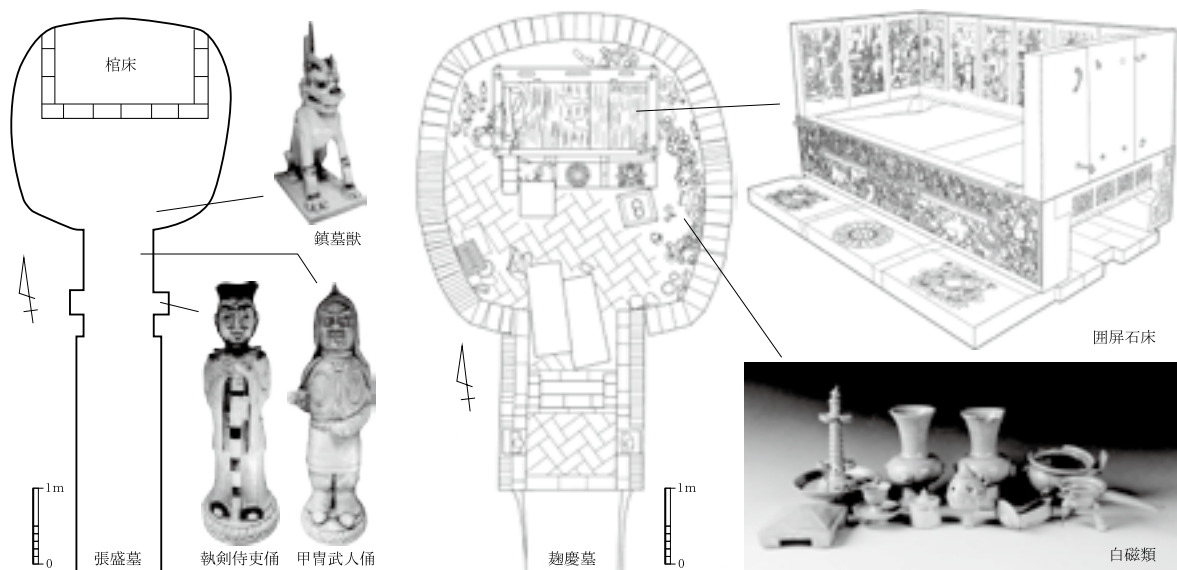


図1 隋張盛墓と麴慶墓

の登場など、唐時代の俑へもつながる新たな要素」がみられ、白胎俑（白陶俑）の造形面でも「女俑に象徴的に表れたように従来の硬直性から一歩進んだ、自由で動きのある独自の新しい造形をつくりあげた」として、その画期性を高く評価している（小林 2015：232-233 頁）。

（2）麴慶夫妻合葬墓との比較

2020年4月、安陽市西南の龍安区において、建設工事中に隋代の塋室墓が緊急発掘された。墓室内からは青石製の圜屏石床が発見され、その前方左右に置かれた二組の墓誌によって、この墓の主人が隋の開皇10年（590）に没した麴慶と、同18年（598）に没した夫人の韓氏であることが判明した（安陽市文物考古研究所 2023）。麴慶の墓誌は「齊故振威麴君之誌」から始まり、北齊の滅亡後、隋には仕官しなかったとみられる。墓誌の記載によれば、麴慶は隴西北平（現在の甘肅南部）の人で、北齊時代に平陽王高淹の府参軍事を務め、司馬へと遷り、振威將軍に加封された。開皇10年5月25日に72歳で亡くなり、半年後の11月25日に相州相県靈泉郷の墓に葬られた。また、韓夫人は昌黎夏城（現在の遼寧西部）の人で、開皇18年9月21日に相県昇平郷淳風里の邸宅において73歳で亡くなり、同年11月5日に合葬された。夫人の祖父は龍驤將軍・領民酋長、父は車騎大將軍・北府主簿であったという。夫人が生前「釈学」に傾倒し、仏教を深く信奉したことも記されている。

麴慶墓の墓室規模は南北3.62×東西3.5mで、張盛墓よりひとまわり大きい。墓室の北側には華麗な彫刻の圜屏石床が置かれ、張盛墓とくらべて葬具も豪華である。ただ、墓の構造や副葬品は、全体として共通する要素が多い。墓はいずれも南向き（やや西）で張盛墓は188°、麴慶墓は187°と方位はほぼ合致する。墓室の平面形は胴張りをもつ方形で、北壁に沿って東西方向に葬具が置かれており、葬具は異なるものの、墓室の形態と空間利用のあり方は共通している。石床の前立板と後立板の左右両端には上下2個ずつ鉄環が打ち込まれており、合計4本の支柱を固定したと考えられることから、麴慶墓でも張盛墓と同様に、棺を覆う帷帳が設けられていたことがうかがえる（図1右）。

甬道の両側に設けられた龕内には刀剣をもつ大型侍吏俑が一对で配され、墓門内側に大型の鎮墓武人俑 2 体と人面・獣面の鎮墓獣各 1 体が置かれていることは、張盛墓の配置と共通する。ただし、大型侍吏俑は石製、鎮墓武人俑と鎮墓獣は白陶質で、材質は張盛墓と異なる。また、墓室内から多数出土した白陶の人物俑の造形も近似しており、数量の詳細は未報告ながら各種の騎馬俑・侍従俑・胡人俑などがあることがわかっている。また、白陶の模型明器には建物・竈・井戸・碾・靴などがあり、また豚などの動物も報告されている。さらに、青味がかった白磁の壺・燭台・香炉・盞・奩状器などが出土しており、これらの多くは墓室内祭祀のための道具である。

報告は、麴慶がシルクロードの要衝地に出自し、長期にわたって漢文化と西域文化の両方になじんできたことが、墓室内の出土品に反映されていると指摘する。例えば、囲屏石床の前立板の図像は西域の文化要素が濃厚であるのに対し、屏風の図像は題材だけでなく人物の服飾や建物の表現にも漢文化の伝統が反映されている。

また、麴慶墓の石床前方に敷かれていた複弁蓮華紋と蓮華宝珠をあらわした 3 枚の石彫は、鄴南城の宮城北部で発掘された 206 号大殿址（中国社会科学院考古研究所ほか 2023）出土の鋪地石の図像と類似し、鄴城から運ばれてきた建築材料であった可能性が指摘されている。北齊滅亡後に鄴城は相州へと降格され、北周大象 2 年（580）に相州の州治が安陽へと遷された。このとき「鄴城及び邑居は皆なこれを毀廢（鄴城及び邑居皆毀廢之）」（『周書』静帝紀）したといい、結果として鄴城の文化は北齊の遺民とともに安陽地域へと遷り、隋代に継承されていった。そのため、張盛墓や麴慶墓をはじめとする安陽の隋墓には、北齊の文化的要素が色濃くあらわれている。

3. 南北朝隋墓の比丘像

張盛墓から出土した人物俑のなかで注目されるのが、2 体の比丘俑である（図 2 左上）。いずれも無釉の白陶で、方形の台座の上に立ち、もともと表面に黄・緑・赤・黒の彩色があったと報告されている。以下では、先行する南北朝墓の比丘図像と比較しながら、その特徴を整理していく。

（1）張盛墓の比丘俑

張盛墓の比丘俑 2 体のうち、大きいものは高さが 22cm、僧祇支の上に田相の袈裟をまとい、下半身に裙を着け、足元には靴を履く。両臂を曲げ、左手は腹前に置き、右手は上にあげて持物を執る。額や目尻、口元には皺が刻まれ、老相をあらわしたものと考えられる。

小さい比丘俑は、高さ 15cm である。僧祇支の上に着けた袈裟の衣摺が左肩から右脇腹にかけて斜めにあらわされる。下半身は裙を着け、足元には靴を履く。右臂を曲げて柄香炉を執り、左臂は伸ばして垂下し、水瓶を執る。顔には皺がなく、目や口元は丸く、若年相とみられる。

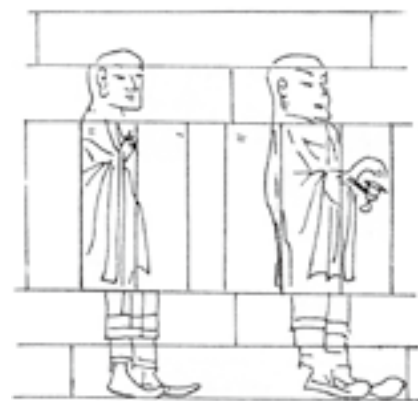
こうした対比をもとにすると、老相の比丘は迦葉、若年相の比丘は阿難を象徴するのだろう。前者の持物は明確でないものの、後者の若年比丘が手に執る柄香炉と水瓶は、僧侶の持物を象徴する器物である（加島 2011）。1984 年に洛陽龍門西山の宝応寺址で発見された唐の禪宗七祖、荷沢神会（758 年没）からは、銅製の塔鉢形合子・浄瓶・柄香炉などが出土した（洛陽市文物工作隊 1992）。また、



張盛墓比丘俑



福建閩侯南嶼南朝墓比丘像



浙江余杭南朝墓比丘像



陝西靖邊八大梁1号墓北壁壁画



陝西靖邊八大梁1号墓南壁比丘像



陝西靖邊八大梁1号墓西壁比丘像

図2 張盛墓の比丘俑と南北朝墓の比丘像

法隆寺玉虫厨子に描かれた「舍利供養図」には、大香炉の両側から2人の僧侶が柄香炉と塔鉢形合子を差し出す姿が描かれている（長谷川 2011）。

馬世長（1983b）は、これらの比丘僧が隋文帝期の仏教興隆を反映したものであることを述べた上で、張盛自身が「義邑」「法社」と呼ばれる宗教的集団の成員であった可能性を指摘している。一方、劉銘恕（1985）はこれを「家僧」「門僧」の制に由来するものだとし、隋唐時代において私度僧がしばしば一般の貴族や官僚たちの家に寄宿していたことを反映するものと考えた。すなわち、一般的な儀仗僧や侍従僧と同じように、比丘僧も墓主の家に属していたと解釈したのである。

（2）北朝墓の比丘図像

2011年、陝西省靖辺県において北魏後期の壁画墓が発掘された（陝西省考古研究院ほか 2013）。この壁画墓は、五胡十六国の夏の都であった統万城の南東約3kmで発見され、八大梁墓地1号墓と名づけられた。傾斜墓道をとまなう単室の土洞墓で、東向きに開口する。地上から5.56mの深さに方形の墓室を掘り込み、漆喰を塗って壁画を描いている。頂部は寄棟屋根をかたどって朱で垂木を描き、墓室の四隅と奥壁中央には柱を描いて、それぞれの柱の上端は斗拱を置いて梁を承けている。

墓室の四面に描かれた壁画には、比丘像を含む仏教的図像が多くみられる。まず、墓室入口の両側、東壁（前壁）の左右には、それぞれ蓮台上に立つ力士像が描かれている。

北壁（左壁）は前方に刀剣をもつ門吏像と動物の生息する山岳が描かれ、後方には胡僧が舍利塔を礼拝する場面が描かれる（図2中段）。舍利塔の塔刹は上から下へと順に、桃形火焰宝珠、五重の相輪、方形二重の須弥座からなる。塔頂の覆鉢の下は、上から下へと階段状にすばまっていく。塔身は小さく、正面の中央下部に門形をあらわし、その下には高大な四重の基壇がある。塔の両側の上空には、天衣をまとって雲を引く飛天があらわされる。塔下には6人の比丘が並んで立ち、それと向かい合うように、胡人が跪いて塔を礼拝している。

西壁（奥壁）は中央の柱によって南北にわけられ、北半には三足鳥に象徴される太陽と、象・鹿・虎などの動物が生息する山林、床上に坐す比丘、さらにその前に立つ比丘が描かれる（図2右下）。床上に坐す比丘の着衣は、覆頭衣のようにみえる。比丘が坐す床は、方形の骨組に籐で編んだ座面と背もたれを加えたもので、下に浄瓶が置かれ、傍らに錫杖（報告は蓮華とする）が立てられている。前に立つ比丘は、僧祇支の上に袈裟をまとい、両腕は腹前に組んで衣端で覆い、斜めに錫杖をもつ。南半には、山林中に入母屋造の瓦葺建物があり、大棟と降棟の端には鴟尾が、下方には基壇があらわされている。上空には蟾蜍に象徴される月が浮かんでいる。

南壁（右壁）は北壁と対応して、前方に山岳と大型の門吏像をあらわし、その後方には右手に蓮華をもつ小冠の人物、さらに山羊がつづき、最後に床上に坐す比丘の姿があらわされている。比丘や床の表現は、西壁北側の図像とよく似ており、やはり傍らに錫杖（報告は蓮華とする）を立てている。

これらの図像が全体として意図するところはよくわからないものの、墓室の三面に比丘が登場し、それらの主題が比丘と関係するものであったことは明らかである。北壁は胡人による塔の礼拝が主題で、6人の比丘が塔を供養している。胡人と墓主との関係は明確でない。一方、西壁では瓦葺建物と

2人の比丘が対比され、これが奥壁に描かれていることを考慮すると、瓦葺建物は墓主の邸宅を象徴するのかもしれない。2人の比丘のうち、床上に坐した比丘は、よく似た人物が南壁にもあらわれ、南壁の壁画は床上の比丘を先導する構成になっている。つまり、各面にあらわされた比丘像のなかで最も重要なのが、西面と南面に描かれた床上の比丘像である。あるいは床上の比丘像が墓主自身を象徴する可能性もあるものの、明確な根拠がないため、これ以上の推論は控えたい。

（3）南朝墓の比丘図像

南朝墓の仏教的要素については韋正（2010）や呉桂兵（2019）の研究が参考になる。南朝では墓室壁面を構築する磚に画像を型押しする手法が流行し、そのなかに少数ながら比丘の図像が存在する。1975年に福建省閩侯県で発掘された南朝磚室墓では、比丘像（図2上段中央）を小口に型押しした2種類の磚が確認されている（福建省博物館1980）。報告が「供花僧」とする比丘はやや背が低く、左手に蓮華ないし香炉状のものを執る。もう片方の比丘はやや背が高く、胸前に方形のものを広げてもっていることから、報告は「誦経僧」と判断した。いずれも剃髪で、裙の上に袈裟をまとい、沓を履いている。この墓は長方形の単室墓で、画像磚は左右の壁に対称的に配置されている。報告の説明には混乱があるものの、左壁には供花僧・侍者と青龍、右壁には誦経僧と白虎があらわされているという。青龍と白虎は下から第4層に位置し、比丘と侍者はその上の第5層に配置されている。

1987年に発見された浙江省余杭南朝画像磚墓（杭州市文物考古所1992）でも、おおよそ左右対称に画像磚が配置されていた。報告では右壁を中心として解説がなされ、墓門から奥壁に向かって順に、刀剣をもつ門吏、向かい合う2人の侍者、さらに4人の比丘が奥へ向かってならび、比丘の上には一対の神鳥があらわされている。4人の比丘のうち、墓門側から1番目と3番目の比丘は胸前で合掌し、2番目と4番目の比丘は柄香炉などの持物を手にしている（図2右上）。

両墓の比丘図像は、いずれも画面に対して右向きであり、あるいは右繞を意識したのかもしれない。これについて韋正（2010）は、右向きに統一されていることに一定の意味はあるとしつつも、それが礼仏を意識したのか、それとも墓主の昇天を助ける役割を期待したのかは確定できないと述べている。一方、呉桂兵（2019：195頁）は閩侯南嶼南朝墓の画像磚について、誦経僧が衆人を引き連れ、念仏を唱えながら祈祷する場面であり、その中心には死者の棺があることから、厳粛な仏教儀礼の情景をあらわしたものと推定している。

4. 張盛墓の副葬品にみる仏教的要素

張盛墓の俑のなかで仏教と関係するのは比丘俑2体のみであるものの、それ以外の器物にも仏教的要素をみてとることができる。ここでは、仏教的要素が顕著にみとめられるものとして、舍利容器に似た白磁の円筒形器と、白陶の数珠をとりあげる。

（1）舍利容器に似た白磁の円筒形器

張盛墓からは白磁の円筒形器（報告は奩状器）1点が出土した（図3）。高さ6.5cmと小さい。胴部中央がややくびれた円筒形を呈し、器面に回転を利用した凹線紋（弦紋）が刻まれる。頂部中央に



図3 張盛墓の比丘俑と南北朝墓の比丘像

は宝珠形つまみがつく。その形状が当時の舍利容器と合致することは、于薇（2018）によって指摘されている。ただし、河南博物院の展示品を観察したところ、この器物は蓋と身が一体でつくられており、実用器ではない。それゆえ、報告も「奩」ではなく「奩状器」としたのだろう。

張盛墓の白磁とよく似た形状の青銅容器は、1987年に河北省正定県北白店村から出土した隋代の「大業元年（605）二月廿八日紹禪師奉内舍利」銘石函内から発見されている（趙ほか 1995）。高さ 9.2cm、直径 6.2cm の円筒形盒で、宝珠つまみの蓋をもち、器面は轆轤挽きにより 10 条の凹線紋をあらわし、稜線上に細い沈線を刻んでいる。本来そのなかに安置されていたと推定されるのが高さ 2.5cm の銀舍利瓶で、瓶中には白色半透明の穀粒大の舍利 1 粒が納入されていた。

同様の青銅容器は、1969年に河北省定州静志寺塔地宮からも発見されている。発掘された地宮は北宋太平興国 2 年（977）の再建・再埋納によるもので、地宮内から北魏興安 2 年（453）、隋大業 2 年（606）、唐大中 11 年および 12 年（857・858）、龍紀元年（889）、北宋乾徳 3 年（965）の各時期の舍利容器と荘嚴具が出土した（浙江省博物館ほか 2014）。そのなかに、隋代の青銅容器と考えられる円筒形盒が 2 点含まれる。総高 9.5cm、口径 7.8cm で、宝珠つまみの蓋をもち、器面に 7 条の凹線紋をあらわし、稜線上に細い沈線を刻んでいる。類似した形状の鍍金石盒 2 点も出土しており、これらは隋大業 2 年（606）金銅函と一緒に埋納された容器であると考えられる。

隋代には、こうした宝珠つまみの蓋をもつ円筒形盒が舍利容器として用いられていた。張盛墓の白磁は容器として使用できないとはいえ、仏教信仰の脈絡において用いられていた容器が墓室内に持ち込まれ、葬儀のなかで一定の役割を果たしたことを想像させる。近年、麴慶墓からも類似した形状の白磁（奩形器）が出土した。報告によれば器高 6.0cm、直径 5.2cm、中実で底部に小孔がある。張盛墓の例と同様、実用器ではなく、儀礼に用いる器物を象徴的にあらわしたのだろう。

（2）白陶の数珠

当初の報告には「陶珠」とのみ記されて詳細が明確でないものに、白陶製の数珠（念珠）がある。これについて、馬世長（1983b：75 頁）は河南省博物館の職員からの情報として「この墓からはさらに百点あまりの陶製の仏珠が出土しているが、原報告では報道されていない」と述べている。

河南博物院に展示されている張盛墓の白陶数珠は、3組にわかれている（図4）。展示品を観察したところ、1連あたり95個前後の陶珠が用いられている。珠の直径は目測で1cmほど、大きさは実用の数珠と大差ない。それぞれの両端には水滴形の特別な陶珠が一对で配されており、それを根拠として3連に復元したのだろう。本来の数量は明確でない



図4 張盛墓の白陶数珠

ものの、各種の仏典によれば、珠の数を108個とする作法は唐代には存在しており、張盛墓の数珠も本来は108珠を意図して製作された可能性がある。

唐の阿地瞿多訳『陀羅尼集經』卷2・仏説作数珠法相品には「経を誦し仏を念じ呪を持する行者のごときは、一一に各おの須く手に数珠を執るべし……其の数は皆な須く諸の相貌を具す、其の相貌は其れ四種あり、何をか四と為すや、一は金、二は銀、三は赤銅、四は水精、其の数は皆な満一百八珠、或は五十四、或は四十二、或は二十一、亦た中用を得（若誦經念佛持呪行者、一一各須手執數珠……其數皆須具諸相貌、其相貌者有其四種、何者為四、一者金、二者銀、三者赤銅、四者水精、其數皆滿一百八珠、或五十四、或四十二、或二十一、亦得中用）」（T18-802c～803a）とあり、各種材質の数珠はみな満108珠とされ、その半数の54珠、あるいは42珠や21珠もあったという。数珠の詳細については密教系の經典や儀軌などに記載がある。真言八祖、唐の不空訳『金剛瑜伽念珠經』には「念珠の分別に四種有り、上品・最勝及び中・下、一千八十を以て上と為し、一百八珠を最勝と為し、五十四珠を以て中と為し、二十七珠を下類と為す（念珠分別有四種、上品最勝及中下、一千八十以為上、一百八珠為最勝、五十四珠以為中、二十七珠為下類）」（T17-727c）とあり、108珠が最勝とされた。

5. 墓室内の儀礼と信仰空間

ここまでの整理と検討をふまえて、張盛墓の墓室内における葬具と副葬品の配置を復元し、それがいかなる儀礼や信仰とかわっていたのかを考察する。墓室内の副葬品は原位置をとどめていなかったが、麴慶墓の出土状況と比較することにより、当初の副葬品配置を推定することができる。

南側から掘り込まれた傾斜墓道を北側へ進んでいくと、墓門付近に3組の鎮墓俑が配置されている。まず、甬道の左右竈に刀剣をもつ大型侍吏俑が一对で配されている。張盛墓例は白磁、麴慶墓例は石製である。さらに甬道を奥へと進むと、甲冑武人俑が一对で置かれ、墓室の入口付近には人面と獣面の鎮墓獸が置かれている。張盛墓例は白磁、麴慶墓例は白陶製である。

墓室は胴張りをもつ方形で、その北側に、東西方向の棺床がある。棺床上からは、釘付式木棺におさめられ、頭を東に向けた張盛夫妻の人骨が発見された。棺床の四隅には、複弁蓮華紋の白陶製台座を置き、支柱を立てて帷帳をかけたと考えられる。麴慶墓でも、墓室の北側に圜屏石床を置き、石床四隅の鉄環に支柱を立てて帷帳をかけていた。

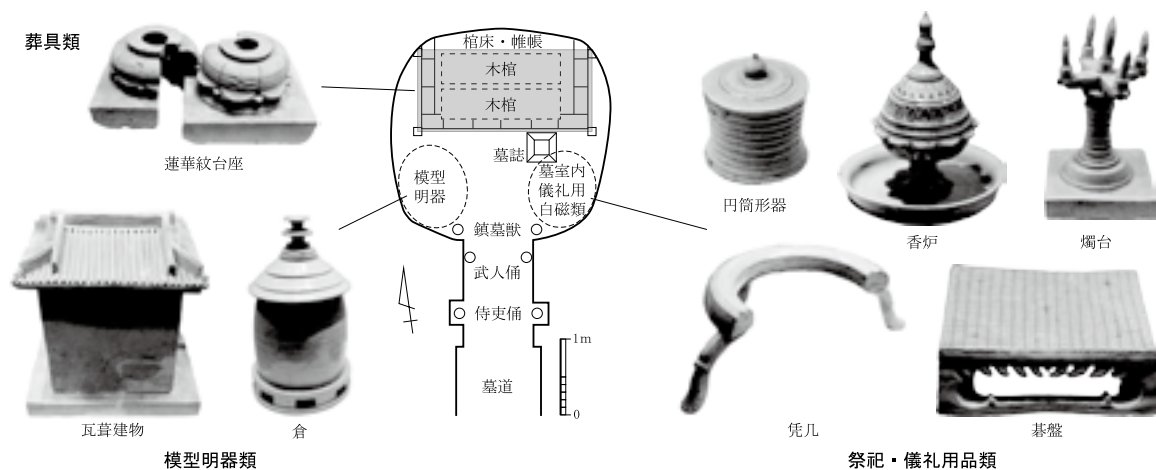


図5 張盛墓の儀礼信仰空間

棺床の東南には、張盛と夫人王氏の墓誌が置かれていた。麴慶墓では石床南面の西側に麴慶の墓誌、東側に夫人韓氏の墓誌が置かれていた。麴慶墓の出土状況(安陽市文物考古研究所ほか 2023:394 頁)を参考にすると、墓室の西側では、南部から中部にかけて白陶製の瓦葺建物・倉・豚などの模型明器が分布し、騎馬俑や人物俑は西側北部の石床付近から集中して出土した。一部の俑は、石床の下にも入り込んでおり、また石床と北壁との隙間からは白陶の瓶や甕・甑・井戸・碓などの模型明器が出土した。墓室の東側は、広範囲にわたって白陶の各種人物俑が散乱し、それに混じって東側北部から白磁の罐・鉢・碗・盒などが、東側中央からは白磁の高足盤・碗・罐・鉢・盒・奩形器・杵などが、東側南部からは白磁の盞・三足炉(鼎)・博山炉・燭台・鏃斗・方形器などが出土している。

総じていえば、白磁の供膳具や明器は墓室東側に、白陶製の模型明器は墓室西側から北側に集中しており、白陶製の各種人物俑は石床の周囲を中心として東西に分布している(図5)。墓室西側の副葬品は、漢代以来の伝統的な模型明器を中心として構成され、それらは生前と同様の暮らしが死後の世界においても継続することを願うものであった。一方、墓室東側の副葬品は白磁が中心で、高足盤・盞・碗・鉢などの供膳具に加えて、香炉・燭台・三足炉(鼎)などが置かれ、全体として儀礼空間を構成している。そのなかに舍利容器と類似した円筒形器が含まれることから、儒教的な儀礼によって死者の靈魂に供物をささげるだけでなく、仏教的な信仰による死者の供養もなされた可能性がある。張盛墓の場合は、さらに比丘俑と数珠が加わり、それらが全体としてどのような場面を構成していたかは、今後の類例の増加を待たねばならない。

6. おわりに

本稿では、河南省安陽の隋張盛墓の出土資料を再検討し、葬儀のなかに仏教信仰がどのように反映されたのかを考察した。すでに先行研究が指摘しているように、張盛墓の副葬品のなかで仏教的要素をもつのは、白陶の比丘俑2体、舍利容器に類似した白磁の円筒形器1点、白陶の数珠であり、それらは張盛夫妻が仏教を崇拝したことを反映するものと考えられる。

さらに、張盛墓の副葬品を、近年発掘された麴慶墓の資料と比較することで、墓室内の副葬品配置や空間利用について手がかりを得ることができた。すなわち、墓室の西側には建物・倉・家畜などの模型明器が置かれ、それらは墓主の財産を象徴するとともに、生前と同様の暮らしが死後の世界においても継続することを願うものであった。それに対し、墓室の東側には白磁の供膳具や香炉・燭台・凭几などが置かれ、死者の靈魂に対する墓室内祭祀の空間を構成していた。そこには舍利容器と類似した白磁が安置され、墓室内祭祀に仏教的要素が入り込んでいたことをうかがわせる。

こうした状況をみると、比丘俑が出土した張盛墓も、夫人が「釈学」に傾倒していた麴慶墓も、いずれも墓での葬儀は儒教的儀礼を中心としておこなわれ、仏教は副次的であったといえよう。ただ、永井政之（1995：125頁）は「そもそも中国仏教の葬送儀礼が次第に儒教的な色彩を帯びるに至る最大の原因は……インド以来の仏教が、具体的な葬送儀礼を持ち合わせていなかったことに尽きる」と述べ、仏教本来の葬儀は簡素であるがゆえに、中国の人々を納得させるためには伝統的な儒教の儀礼と組み合わせる必要があったと論じている。そうであるならば、墓室内の仏教的要素がごくわずかなことからいって、仏教的な葬儀がおこなわれなかったと結論づけるのは早計である。実際にどのような儀礼が墓中でおこなわれたかを復元するには、まだ資料が足りない。今後の課題としたい。

参考文献

- 章 正 2010「試談南朝墓葬中の仏教因素」『東南文化』第3期
- 安陽市文物考古研究所・河南省文物考古研究院 2023「河南安陽隋代麴慶夫妻合葬墓の発掘」『考古学報』第3期
- 于 薇 2018『聖物制造与中古中国仏教舍利供養』文物出版社
- 加島 勝 2011『柄香炉と水瓶（日本の美術 第540号）』ぎょうせい
- 考古研究所安陽発掘隊 1959「安陽隋張盛墓発掘記」『考古』第10期
- 杭州市文物考古所 1992「浙江省余杭南朝画像磚墓清理簡報」『東南文化』第3・4期
- 国立扶余文化財研究所編 2017『百濟王興寺—百濟王興寺創建 1440 年記念特別展—』扶余郡・国立扶余文化財研究所
- 小林 仁 2015『中国南北朝隋唐陶俑の研究』思文閣出版
- 呉 桂兵 2019『中国喪葬礼俗中仏教因素演進的考古学研究』科学出版社
- 浙江省博物館・定州市博物館編 2014『心放俗外—定州静志 淨衆佛塔地宮文物』中国書店
- 陝西省考古研究院・榆林市文物保護研究所・榆林市考古勘探工作隊・靖辺県文物管理辦公室・靖辺県統万城文物管理所 2013「陝西靖辺県統万城周辺北朝仿木結構壁画墓発掘簡報」『考古与文物』第3期
- 中国社会科学院考古研究所・河北省文物考古研究院鄴城考古隊 2023「河北臨漳県鄴城遺址東魏北齊宮城区 206 号大殿基址及附属遺迹」『考古』第2期
- 趙 永平・王 蘭慶・陳 銀鳳 1995「河北省正定県出土隋代舍利石函」『文物』第3期
- 馬 世長（関野雄記）1983a「隋張盛墓の出土文物」河南省博物館編『河南省博物館（中国の博物館 第7巻）』講談社
- 馬 世長 1983b「關於隋代張盛墓出土文物的幾箇問題」『中原文物』第4期

長谷川智治 2011 「法隆寺 玉虫厨子考—舍利供養図を中心に—」『佛教大学総合研究所紀要』第 18 号
永井政之 1995 「中国仏教成立の一側面—中国禅宗における葬送儀礼の成立と展開—」『駒澤大学仏教学部論集』
第 26 号
福建省博物館 1980 「福建閩侯南嶼南朝墓」『考古』第 3 期
水野清一・長廣敏雄 1941 『河南洛陽 龍門石窟の研究』東方文化研究所研究報告第 16 冊 座右宝刊行会
向井佑介 2014 「墓中の神坐—漢魏晋南北朝の墓室内祭祀—」『東洋史研究』第 73 巻第 1 号
洛陽市文物工作隊 1992 「洛陽唐神会和尚身塔塔基清理」『文物』第 3 期
李 炳鎬 2015 『百濟寺院の展開と古代日本』塙書房
劉 銘恕 1985 「隋唐時代的僧侶和仏教的門僧制」『中原文物』第 1 期

図出典

- 図 1 張盛墓：平面図は考古研究所安陽発掘隊 1959 より再トレース、写真は筆者撮影（河南博物院展示資料）
麴慶墓：安陽市文物考古研究所ほか 2023 より転載
- 図 2 張盛墓：筆者撮影（河南博物院展示資料）
福建閩侯南嶼南朝墓：福建省博物館 1980 より転載
浙江余杭南朝墓：杭州市文物考古所 1992 より転載
陝西靖辺八大梁 1 号墓：陝西省考古研究院ほか 2013 より転載
- 図 3 張盛墓：筆者撮影（河南博物院展示資料）
麴慶墓：安陽市文物考古研究所ほか 2023 より転載
河北正定出土・定州静志寺塔址出土青銅容器：浙江省博物館ほか 2014 より転載
- 図 4 筆者撮影（河南博物院展示資料）
- 図 5 平面図は考古研究所安陽発掘隊 1959 より再トレース、写真は筆者撮影（河南博物院展示資料）